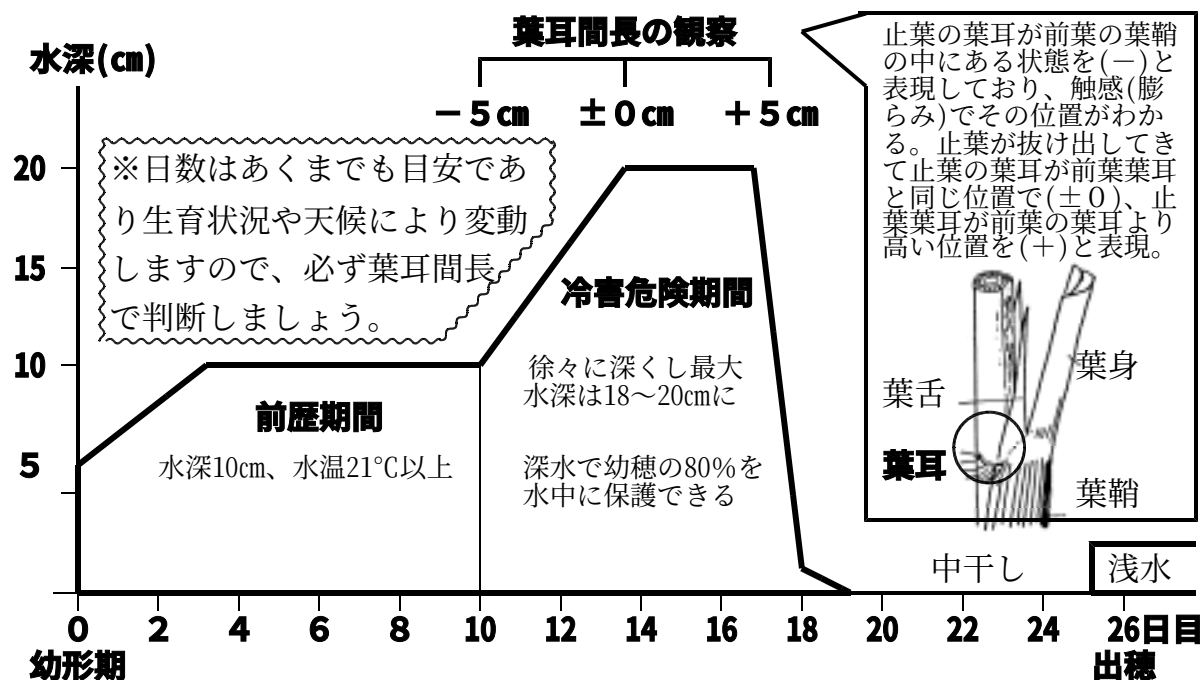


7月の技術対策（水稻）

平成17年7月1日
JAきたそらち・JA北いぶき
空知北部地区農業改良普及センター
雨竜西部地区農業改良普及センター

1 幼穂形成期からの深水管理で不稔発生を防止する！

- 前歴期間の深水管理（「攻め」の水管理）
幼穂形成期を確認したら水深を除々に深くし、冷害危険期まで10cmの水深を保ちましょう。花粉の基となる細胞の分化が増進され、稔実歩合が向上します。
- 冷害危険期の深水管理（「守り」の水管理）
冷害危険期に幼穂が低温に遭遇すると、花粉が退化したり発育不全となります。このことが不稔の多発につながるのので、深水管理を徹底してください。
 - 葉耳間長が－5cm～＋5cmの期間が冷害危険期（下図参照）。
 - 主茎の葉耳間長が－5cm（危険期始まり）となったら除々に水深を深くして18～20cmの水深を保つ。
 - 80％程度の茎の葉耳間長が＋5cm（危険期終了）となるまで継続する。



- 深水管理の目的は水温確保です。入水は日照が期待できる日の夜間～早朝に実施し、日中は「止水」とし水温上昇に努めましょう。また、急激に水深を深くしたり、日中の入水・かけ流しは水温を低下させるので避けましょう。
- 冷害危険期終了後は中干しを行い、根に活力を与えましょう。
 - 冷害危険期終了後から出穂直前までの間に実施する。
 - 併せて5～10m間隔で溝切りを行う
(登熟期間の走り水や収穫に向けた落水がスムーズに行える)

2 病虫害防除～予察に基づいた的確な対策を！

いもち病とカメムシの防除体系

対象病虫害	場所	基幹防除				臨機防除	
		6月 下旬	7月 上旬	7月 中旬	7月 下旬	8月 上旬	8月 中旬
いもち病	水田	水面施用剤 又は 予防剤茎葉散布 (いもち病の発生が懸念されるほ場)			出穂期	出穂後 7～10日 (発生状況により)	
カメムシ	水田				出穂期	出穂期後 7～10日	予察結果に 基づき判断
	畦畔	← 雑草刈取り →				← 雑草刈取り →	

【いもち病】

- 出穂期の防除は、節・穂いもちの感染防止のため必ず実施してください。
- いもち病の発生が懸念されるほ場で、薬剤の育苗箱施用をしていない場合は遅くとも7/5までに水面施用剤を散布しましょう。また、水面施用剤が使用出来なかった場合は7/10～15頃に予防剤の茎葉散布を行ってください。

【いもち病の発生が懸念されるほ場】

- 過去にいもち病が発生したことのあるほ場。
- 生育量が大きく、葉色の濃いほ場（特に、ほしのゆめ、ななつぼし）。
- 建物の陰、沢地帯など風当たりの弱いほ場。

(3) 葉いもち病の発生予察を実施しましょう。

例年発生しやすい水田を重点的に観察し、発生を確認したら5～7日間隔で防除を行いましょう。予察にあたっては、病虫害防除所のホームページで公開されている「BLASTAM情報（いもち病発生予測システム）」を参考にしてください。

病虫害防除所ホームページ <http://www.agri.pref.hokkaido.jp/boujoshou/index.html>

【BLASTAM情報に基づく葉いもち病発生予察】

- BLASTAM情報より、近隣市町も含めて発生好適日や準好適日を確認する
- 発生好適日、準好適日があったら、その7～10日後に予察を行う。
- 予察は、発生しやすい水田で1畦10m×4m所を調査する。

【カメムシ（アキゲホミドリカスミメ）】

- 水田への飛び込みが集中する出穂期とその7～10日後は必ず防除しましょう。
- 出穂期の防除までに畦畔や雑草地等の雑草刈取りを実施して下さい。
- 捕虫網によるカメムシすくい取り調査を行い、臨機防除の要否を判断する材料としてください。

【臨機防除の検討が必要となる場合（捕虫網20回振り捕虫数）】

- 畦畔で6月下旬～7月上旬（第1回成虫発生期）に5頭以上。
 - 畦畔で7月下旬～8月上旬（第2回成虫発生期）に23頭以上。
 - 水田内で出穂始に6頭以上（ほしのゆめ 3頭以上）。
 - 水田内で出穂期に16頭以上（ほしのゆめ 8頭以上）。
- 但し、最終的な臨機防除実施の要否は、基幹防除後に水田内すくい取り調査を行って判断する。